招致しぬ。茲に於て契丹はベラサグンに入りて王位に上り、エフラシアブの後系より汗の號を奪ひ、これにイルクツルカン（Ilk-Turkan）卽ちツルクの首領なる號を與ふるに止めぬ」（ドーソン蒙古史卷一、四四二）と記せり。イレク・カン家は有名なるクダツクビリクなる書の編纂當時のボグラ汗以後領土分裂し、大石の西征の際に於てベラサグンを治せし可汗の名も明らかならざれば、畢勒哥なる名を其の可汗に比定せんよしはなけれども、思ふに此の名は實は稱號にして、回鶻可汗の美稱に普通に用ひらるゝ毗伽と同じく bilgä 卽ち「賢き」の語を寫したるものに過ぎざるべし。此の如くイレクカン家が容易に大石に降りしことを以て遼史本文の記事に對比し、また大石の此の國に入りし年が一一三二年にして（後述）、高昌の回鶻とは其の前年九月に於ても尚ほ敵對したりしものなることを考へ合すれば、地理上の關係よりしては略ぼこれが高昌地方の回鶻なりしと思惟せらるゝに係はらず、或はイレク・カン家の者をいへるには非ざるかとの疑ひを抱かしめざるにも非ざるなり。

四　忽兒珊との戰

次に進みて大石が忽兒珊なるものと尋思干に戰ひたる事實につきて、西方史籍の記する所を參照すれば、之がホラッサンのセルジューク家のサルタン、サンジャール（Seldjuk Sultan of Khorassan）との戰ひなること疑ひなし。ドギニュ氏は忽兒珊なるものをホラズムのサルタンと考へ（Histoire generale des Huns, Tom. II, Livre XIV. p. 253.）ブレットシュナイデル氏の如きも、一は遼史本文の紀年を尊重したると、一はドギニュ氏と同じく忽兒珊（hu-erh-shan）をホラズムシャーの音譯と考へたるが爲に、「回教徒の歷史家は黑契丹とホラズムシャーも